APT

研究開発拠点のオープニングセレモニーを開催

テープカットに臨む亀山社長、井上社長、網課長（左から）

シーアールイーグループで物流システムやソフトウェアなどを提供するＡＰＴ（本社・千葉市美浜区、井上良太社長）は10日、千葉県習志野市に開設した研究開発拠点「KocoLabo（ココラボ）」のオープニングセレモニーを開催した。

「KocoLabo」は、物流業界の課題解決に向け、海外メーカーのハードウェア機器の国内最適化、独自ソフトウェアによる制御テストなどを行うＡＰＴの研究開発施設で、野村不動産の物流施設「Landport習志野」内の「習志野PoC Hub」に開設した。３Ｄの動きを実現したケース搬送用ロボットストレージシステム「Hive」や、昇降を担うロボットと走行を担うロボットの２種類のロボットにより保管場所と作業場所の間を効率よく搬送する「QUICK BIN」、パレットを自動搬送する「SLIM AGV」、パレット保管ロボットシステムの「パレットシャトル」などを導入・設置し、同社の強みである物流システムエンジニアリングや自動倉庫システムのリニューアルなどのノウハウを活用しながら、高機能な独自ソリューションを開発している。

オープニングセレモニーで挨拶した井上社長は、はじめに、KocoLaboの完成に尽力したスタッフに対し「コロナの影響など多くの困難や、日々の業務と並行しながら完成にこぎつけて

ロボットストレージシステム「Hive」

くれ、心から感謝したい」とねぎらいの言葉をかけた。そして「１社でも多くの企業にKoco-Laboに足を運んでいただき、当社の人、技術、製品をつなげるインテグレーションの真髄を、ここを通じて発信していきたい。この施設を大いに活用し、ビジネスを大きく成長させていかなければならないと思っている。それが皆様への何よりの恩返しとなると思っている」と力を込めた。

来賓を代表して挨拶したシーアールイーの亀山忠秀社長は「コロナ禍以降、倉庫内の無人化、省人化へのニーズが一層高まっている。さまざまな産業・分野での自動化に対する需要の高まりを受け、世界的にマテハンの市場は拡大してきている。市場の拡大をしっかりと味方に付け、KocoLaboを発信源にＡＰＴさんの素晴らしさを日本のみならず世界に発信し、成長し続けてほしい」と祝辞を述べた。また、習志野PoC Hubを運営する野村不動産・都市創造事業本部物流事業部の網晃一事業企画課長は「ＡＰＴさんとはKocoLaboの構想段階から、物流のあるべき姿をどう実現していくか、といった熱い議論を交わしていたことを今でも鮮明に覚えている。今後、KocoLaboでの取り組みを通し、より一層飛躍するＡＰＴさんとともに、いろいろな企業と一緒になって力を掛け合わせて、物流課題の解決に取り組み、実現できることを楽しみにしている」と祝った。■